
翔ちゃんによろしく

木村よし

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

翔ちゃんによるじく

【Zコード】

Z3828D

【作者名】

木村よし

【あらすじ】

完結　『それとも、ほんとは襲つて欲しかったとか?』『な…つ…!』平凡な奈緒と、チヤラ男の翔。全く似合わない二人は、実は幼馴染。擦れちがい、不器用な恋が静かに動き出す…。『行かないでよ、翔ちゃん。』

0・(前書き)

はじめまして。木村よしです。
この『翔ちゃんによりじく』が初投稿になりますが、よりじくお願
いします。

また、感想や批評、アドバイスや駄目だしなど、皆様からの書き込
みが、よしの生きる力となります笑。
なので、ちょっとしたことでも、よければ書き込んでやってください。
お願いします。

0 .

0 .

翔ちゃん。

呼んでみる。返事が返ってこない」とへりこわかつてこむナビ。

翔ちゃん。

なんで翔ちゃんみたいなの、好きになつたやつたのかなあ。

今までも、これからも、私たちはずっとただの幼馴染。

好きだなんて言わない。

それくらい、わかってるから。

翔ちゃん。

1・保健室

1・保健室

気分が悪い。朝から、頭がグワングワンする。風邪かな。ちょっと
くらい大丈夫だつて思つて学校来たけど、三時間目が終るころには
本格的に調子が悪くなつてきた。
ふらりふらりと保健室。

「先生、気分悪いよお」

額を押さえながらガラリと扉を開ける。

「あ」

「あ」

「気分悪いの？大丈夫？」

優しく問い合わせてくれる保健室の先生と、もう一人。

少し茶色く染めた髪が、耳に開いた穴をうまく隠している。

「翔ちゃんもいたんだ

「こちや悪いかよ」

中村翔。典型的な軟派男。

私、相模奈緒の幼馴染。

「中村くんも気分悪いみたいなの。最近風邪が流行ってるからね」

P R U R U R U U P R U R U R U U

内線電話が鳴る。受話器をとり、適当に相槌をつつ先生。

「中村くんに相模さん、悪いんだけどちょっとここを離れなきゃいけないの。すぐ戻つてこれると思うんだけど、少しの間静かに寝てられるかしら?」

「あ、はい。大丈夫です。」

「「めんね。じゃあ、ちょっと失礼するわね

先生が出て行くと、翔ちゃんは何も言わずにベッドの中へ。カーテンを引き、しっかりと境界線をつくる。

私も、その横のベッドの中へ。

カーテンを通して、薄暗いクリーム色の光が布団の上に落ちてくる。少し寝ようと畳を開じる。

「なあ、奈緒。」

「・・・なに?」

カーテン越しの会話。

「お前、彼氏できただろ。」

この人は、いきなり何を言っているんでしょう。

「・・・なんで?」

「一年の菊池。」

「菊池くん?」

菊池忠義くんは、料理部の後輩。

「ん。この前の日曜日、一人で歩いてただろ。」

「ああ、あれね。今度部活で使う材料の下見だよ。」

「ふうん。」

「ふうん。」

「なあ、俺さ、実はマジな奴がいるかも。」

「・・・」

「ひでいつたうどうするへ。」

「じつあんなこも、今付せぬ//ホカホカせどりゅうのよ

「あんなのはじめから遊びだし。」

「かわいい。翔ちゃんみたいなのとかわいい、絶対泣くな

「意外と優しいんだぞ、俺。」

「はいはい。」

「試してみる?」

「みません。」

「モーですか。ま、奈緒はもはや女じやねえしな。」

「・・・」

がぱりと体を起しす音と、しゃつといつカーテンの音が聞こえてきて、翔ちゃんが出て行くんだなってわかった。

「じゃ、俺そろそろ行くわ。」

「ん。じゃあね。」

ドアの開く音がして、また静かになる。
行っちゃった。行かないでよ。まだ私ここにいるじゃん。

ねえ、本気で好きな子って誰？私の知ってる子？

本当は、いろいろ聞きたいんだよ。

翔ちゃんからそういう話をされる度に、私の心はギュッて痛くなつて、涙が出そうになるんだよ。

翔ちゃん。翔ちゃん。

好きだよ。翔ちゃんが、好きだよ。

でもね、言えない。私は翔ちゃんにとっては女じゃないくて、ただの
幼馴染だもん。

苦しいよ。

翔ちゃんが大学生の女の人と付き合いだしたのはそれから一週間後のことでのことで、別れたのはたった三週間後のことだった。

2・おせんべえ

2・おせんべえ

ピンポーン。

私の住むマンション。

私の住む階の一つ上の階。

ドアのチャイムを押す。少しあたって、翔ちゃんの声がした。

『はー』

「奈緒です」

『あい、いらっしゃい。ちょっと待つてね』

プツリとインターホンの音声が途切れる。

がちゅうどドアが開くと、そこには翔ちゃんが立っていた。

「よお

「あ、よお。へ、ねばひやんせ?」

「なんか俺が丑聞か?」

「これはおばちゃんなりに氣を利かせたつもりなのだろ?」

「あのね、親戚のおばちゃんが沢山おせんべえ送つてくれたから、
おすやわけ。はい」

すい、と手に持つていた大きな袋を差し出す。中には色々な種類の
おせんべえ。

「あー、さんめき」

「うそ、じゃ、これだけだから」

またね、と皿をひととしたとき、母から「あがつてもうこなれあー
つてこいつおばちゃんの声が聞こえた。

その間に、翔ちゃんは少しだけ恥ずかしそうに頭を搔いた。

「あー、もし良かつたら上がりつけよ。散らかつてゐナビ」

「え、ここの?」

「ぐふと頷く翔ちゃん。

「じゃ、遠慮なく」

そのあとおばちゃんもHプロンド手を拭きながらきて、私を中心に入れ入れてくれた。

廊下の突き当たりの部屋に通される。

かなり久しぶりに入る翔ちゃんの部屋。以前とあまり変わってなくて、少しだけ嬉しかった。

「適当に座つて」

「あ、うん」

本当に適当に、ベッドの上に座った。ぱふっと少しだけ情けない音がした。

「久しぶりだね、翔ちゃんの部屋入るの」

「やうが？」

「うん。中学生のとき以来だよ。一年ぶりくらい」

部屋の中を何気なく見回していると、おばちゃんがジユースとクリーを持つてきてくれた。

夕飯も食べていいかないと聞かれたけれど、それはさすがに図々しいので断つた。

少し残念そうに、おばちゃんはゆっくりしていってね、といつて再びリビングの方へと戻つていった。

「ゲームでもするか？」

「どうなのがあなたの？」

「アクションがほとんびだな。あ、でもふよふよならお前もできるだい」

「あ、今ちょっと馬鹿にしたでしょ」

「わかった？」

「うひうねご。ふよふよでこー。絶対勝つんだから」

確かにゲームは苦手だけじ。結構得意なんだぞ、ふよふよ。

機械を出しておいて、線をつなぐ。

まあ始めるといコントローラーを手にしたとき、翔ちゃんの携帯が鳴った。

翔ちゃんは断つてから電話に出る。

やうこいつがうとしたとき、素敵だなあとか思つてしまつ。

少し話してから、翔ちゃんは携帯を閉じた。

「わりい、ちょっと行かなきや駄目なんつた

「やつか。女の子?」

「ん、まあな。」

「モテる男もたいへんだねえ。じゃ、私帰るわ」

「いめんな

「全然いいって。気にしないでよ」

一人揃つて部屋を出る。

おばちゃんに挨拶をしてから、靴を履き、マンションの廊下へ出た。

外は少しだけ冷えていた。もう、五月だとうのう。

一つ階段を下ったところで翔ちゃんに呴られる。

軽く手を振つてから弔び下へと降りていく翔ちゃんの背中を、見えなくなつてもじぱりと見ていた。

翔ちゃんが今向かつてゐるのは、誰のところなのだろ？

翔ちゃんが行かなきやいけないつて言つたとき、ほんとせすうじへ寂しかつた。

でも翔ちゃんはひつこ女は嫌いだから。止めるのひととて、私はしない。

わやんと笑つて。でも本當は泣いてしまつて辛かつたり。

だからせむり、今は近くの明かりさえ涙でせむけやつ。

わへ。こんな感じ家に帰れないじゃん。

翔ちゃんの、
ばか。

3・ふよふよ

ドアのチャイムが鳴って、俺はいつもみたいに聞こえないふりして、たまには出て欲しいわとかなんとか言いながら、母さんがインター フォンのディスプレイの所まで歩いていくのが聞こえた。

どうせ新聞の勧誘がなんかだらうと思つていたから、母さんが「奈 緒ちゃん」と言つた時は思わずドキリとした。

それから少しして、奈緒ちゃんが来てくれたから出てあげてと母を んが言いに来た。

面倒くさいなあとが言いながらも、玄関へ向かう。

そんな俺を母さんは変な笑顔で見てくる。たぶん、この人には隠し 事はできない。

ドアを開けると、ジーンズに淡い色のロングエシャツを着た奈緒が 立っていた。

母さんが出てくれると思っていたのだから、俺の顔を見ると、奈緒は少し驚いたような顔をした。

ああ、それすらも可愛しかったやつてるし。

おせんべえを俺に渡し、帰るひとした奈緒を母さんの声が引き止める。

ナイス、母さん。

「あー、もし良かつたら上がつてけよ。散らかつてめがだ」

「え、いいの？」

こへつと頷く。

「じゃ、遠慮なく」

こつこつ笑って、奈緒がつかの中へ入っていく。

その、前を行く小さな背中が、奈緒が女だと言つてをあつあつと俺に感じさせる。

相模奈緒。俺の幼馴染。

そして、

俺の好きな女。

「適当に座つて」

「あ、うん」

部屋に入り、奈緒がボフリとベッドの上に座る。

「久しぶりだね、翔ちゃんの部屋入るの」

「そうか？」

「うん。中学生のとき以来だよ。一年ぶりくらい」

もつそんなになるのか、とか思いながら、頭の中で必死に最近の記憶を探る。

まあ」の年の男の子ですか。とっても健全な男の子ですか。
やつぱりそういうモノは持つているわけで。

たしか、何本かは」の前面本（友達）に貸してまだ返ってきてない。

他は、たぶんクロゼットの奥のほうに閉まつてあるはず・・・。

よし、なんとか大丈夫。

その後母さんがジュースとクッキーを持ってきて、少しだけ奈緒を喋った後、またリビングの方へ戻つていった。

ん、ちょっと待てよ。

今、奈緒と二人きりじゃん。

ちらつと奈緒のまつを見た。まだ懐かしいつづき部屋の中を巡回していた。

何にも知らないような無垢な顔して（こや、もしかしたら本当に何も知らないのかもしない）。

やつこのひのひたひ、やつぱり俺は奈緒にひとてはただの幼馴染なんだなつて。

だから、一人きつでも、何にもすることができない。

「ゲームでもするか？」

「どんのがあんの？」

「アクションがほとんぢだな。あ、でもふよふよならお前もできるだろ」

「あ、今ちょっと馬鹿にしたでしょ」

「わかった？」

「ひつじおこ。ふよふよでいい。絶対勝つんだから」

奈緒がゲーム弱いことくらい、もうずっと前から知っている。

あと、アクションとか、暴力系なのが嫌いなのも。

ふよふよは、奈緒が唯一気に入ったゲームで。

だから、俺もふよふよが好きになつて。

機械を出してきて、線をつなぐ。

まあ始めるよつとパソコンローラーを手にしたとき、俺の携帯が鳴った。

「めんと断つて、携帯を開く。

ディスプレイを見ると、この前から付き合って始めた女の子からだつた。

「もしも」

『もしもし、アイだけどお』

「なに?」

『なんか、別れるとか意味分かんないメールきてたんだけどお』

「うん。送ったもん。

「意味はわかるでしょ。『めんだが、そういうことだから』

『え~嫌だ嫌だ!』つち来て。会いたい。あつて話したいよおー。』

「話すも向む、」

『すぐ来てくくれないと川に飛び込んで死んでやるんだからー。』

「わかったよ。行くから。場所どー』

今彼女のいる場所を聞いて電話を切る。

「うう、全身フローロモンでできてますみたいな女は正直好きじゃない。」

皆の前ではあくまでも好きな風に装つてゐるナビ。

「わりい、ちょっと行かなきゃ駄目なんつた」

「そつか。女の子？」

「ん、まあな。」

「モテる男もたいへんだねえ。じゃ、私帰るわ」

「うめんな」

「全然いいって。気にしないでよ」

二人揃つて部屋を出る。

靴を履き、マンションの廊下へ出た。

別れ際も、奈緒は相変わらず笑顔で手を振った。

それがなんだか嫌で、そのあとは一度も振り返らずに一気に階段を駆け下りた。

俺と奈緒は幼馴染で、奈緒にとって俺は男じゃないっていってくらい、表情とか見てたらわかる。

俺の気持ち知つたら、たぶん奈緒は困るから。

もつ今までじょろじょろ話すこともできないとか、やつぱりかなり辛いからや。

だから、わざと他の女の子と沢山遊ぶ。

あたかも、奈緒には興味ありませんよおつて。

ほんとうさー、奈緒以外の女なんて、どれも同じなんだよ。

何も感じない。

抱きたいとも、キスしたいとも思わない。

そつ懲りのせ、せっぱつ奈緒だけで。

その日、アイとはやっぱり別れた。

そのかわしつかりティナーを奢られたけどね。

4・手

4・手

最近日差しが強くなつてきて。

もう夏だな、とか思つたり。

今日も、入梅前あの爽やかな天氣。

なのに私の体調は最悪だった。

女の子にしか分からぬ、アレのための貧血。

一応フルーン食べてきたんだけどな。やっぱ効果無し。

体操服に着替えながら、こんな熱そうな外で今から体育とか大丈夫かな、と少し心配になる。

でも今日は合同体育。

AクラスとDクラス。

Aは私のクラスで、Dには翔ちゃんがいる。

だから今日の体育はサボつたりできないとか、かなり不純な動機です。『じめんなれ』。

ロッカーを出て、日焼け止めで幾分白くなつた顔の加奈と小百合と喋りながらグラウンドへ向かう。

加奈と小百合とは一年の時からクラスが一緒で、それからはかなり仲良し。

「あつち～。絶対焼けるしーー！」

外に出るなり小百合が悲鳴をあげる。

「今日会団でしょ？何やるか知ってる？」

「なんかドジジやん！」

「げ。私ドジジ嫌いなのに」

とか言いながら、加奈は何でもできる。

勉強も、スポーツも。

「でもさ、男子とは別だし」

「小学校のときは男子も一緒にやつてたもんね。かなりスリリングだつたし！」

「男子と別つてだけでも、小学校のときに比べたらかなりマシかも」

とか話してて、なんでいつもひつなるかなあ。

始まつてみると、今日は何故か男女混合でやるとか先生が言い出した。

女子からはブーリングの嵐だつたけど、男子は乗り氣で。

結局男女混合でやることになつた。

クラス対抗といつことになつて、数人が外野に出て残りは皆箱の中。

私も外野で出たかったけど、最後の最後でジャンケンで負けた（加奈と小百合は一番に勝って、さつさと外野に出て行った）。

ふと相手のチームのところを見ると、翔ちゃんも内野らしく、数人の男子と楽しそうに何か話していた。

あー外野なりたかったな。

そしたらもうちょっと翔ちゃんに近づけたのに。

「相模さん、大丈夫？」

「え？」

いきなり声をかけられて、少し驚いて振り向くと、クラスメイトの上条くんが心配そうな顔をして立っていた。

「顔色悪いから」

たしかに、さつきより正直しんどい。

「大丈夫。ありがとう」

「そう?」

「うん。心配してくれてありがとうね。」

「しんどかったら無理しちゃ駄目だよ」

そう言って、上条くんは相手チームの方へと走っていった。

上条くんって優しいな。顔もかっこいいし。

そんなことを思つていると、ふと翔ちゃんが立っていた。

ちょっぴり嬉しくて、小さく手を振った。

でも、翔ちゃんはふいと顔を背けて、もうこちらを見ようとまじなくつた。

あれ? 私にかしたのかな。

なんだか気になつて、ずっと翔ちゃんのことに見ていたけど田舎を合わせてくれるかんじもしなくて、だんだんと悲しくなつたきた。

フリフリある頭で、嫌われたりどうりみつけられ不安がぐるぐると渦を巻く。

そのときだつた。

「あぶない！」

「ガン！」と男子の投げたボールがきれいに私の頭にヒットし、「うわ、私かっこわる、とか思いながら、上條くんの心配そうな声が聞こえたような気がしたが、私はどうどう意識を手放した。

「ん・・・」

夢なんて見なかつた。

うつすらと田を開ける。少し固めのスプリングの感触で、口が保健室だとわかる。

「・・・わたし・・・」

「大丈夫か、奈緒」

「翔ちゃん・・・?」

穏やかな顔をした翔ちゃんが、私の顔を覗き込んでいた。

「お前倒れたんだよ。みーとにボールが頭に当たって」

「ん」

そうだった。

「（）まで・・・翔ちゃんが運んでくれたの？」

「まあな。かなり重かつたし」

失礼しちゃう。

いつもなら「」で文句の一いつへじて書つてしまふだが、今は、なんだか少し変だ。今の普段と変わらない翔ちゃんの「」、ものづくべ「」が痛いのか？。

「おこ、なに泣いてんだよーーー！」か痛いのか？」

涙が止まらないよ。

「翔ちゃん、私、何か嫌な」とつけ加えたかなあ

ゆづくつと体を起す。

「は？」

「体育の時間、翔ちゃん私の」と無視した

「それは・・・そんなこと、ねえし」

「したものん」

「・・・」

「翔ちゃんに嫌われるの、私嫌だよな」

「こんななんじや駄目だ。泣ぐの止めなきゃ。」

「でも止まらなくして。」

ベッドの端に軽く腰掛けた翔ちゃんが、少し困った顔をする。

「翔ちゃん、翔ちゃん」

「ん」

「翔ちゃん、私のこと、嫌いにならないで」

「・・・なりなこよ。奈緒のことが、嫌いにならぬから」

そつまいながら、翔ちゃんは優しく私の手を握ってくれた。

「いみんな。奈緒」

繋いだ手から伝わる翔ちゃんのぬくもりを感じるのは、なんだか切なくなつていく。

こんなのが、ただの鬱陶しい女じやん。

だけど、

今だけ。

今だけでいいから。

翔ちゃん。翔ちゃん。

もう少しこのまま、この手を離れないで。

4・手（後書き）

はじめまして。

木村よしといたします。

『翔ちやんによろしく』にアクセスしていただき、本当にありがとうございます。

もしも「この展開、この方がよかつた」などありましたら、よければ批評してやってください！

皆様の「」意見を参考にして、もひとつひとつといふ作品を書いてこられるようにがんばります

これから、木村よしと『翔ちやんによろしく』をどうぞよろしくおねがいいたします。

5・ベッド

5・ベッド

宮本たちが楽しそうに話しているのを聞きながら、ちらりちらりっと奈緒の方を見る。

なんだか今日は顔色が悪い。

いつも一緒にいる桜井（加奈）や藤井（小百合）は何も気づかないのだろうか？

何度も何度も眉間に中指で押さえる奈緒。あれは大抵いつも体調が悪いときにする、小さい頃からの奈緒の癖だった。

大丈夫だろうかと、それからも何度も見ていると、男子が一人奈緒に近づいて行くのが分かった。

名前は知らないが、まあそこそここの奴であることは、こっからでも見て取れた。

誰だ、あれ。

心臓が少しだけ早くなる。

そいつに優しく笑顔をつくる奈緒。

そんな顔、他の奴に見せるなよ。

そいつのこと好きなのかよ。

なんだか無性に苛々してきた。

ふと田が合い奈緒が手を振つてきたが、笑顔で返すよつた気分じや
なくて、思い切り目をそらした。

そのときだった。

誰かの叫ぶ声が聞こえて、一気にグラウンドの空気が変わる。

見ると人だかりの真ん中に奈緒が倒れていた。

「奈緒？！」

「大丈夫？！奈緒！！」

桜井や藤井、それから他のクラスメイトたちの声が聞こえる。

「下手に動かさない方がいい」

「たしかに上条の言ひとおりだ」

近づいてみると、さつきの男子と先生が話していた。

「上条、相模を保健室に連れて行つてくれるか」

「はい」

上条とかいう奴が、しゃがんで奈緒の体の下に手を差し入れようとする。

「俺が行く」

「え？」

突然出てきた俺に、少し不信な顔をする上条。

「僕一人で大丈夫だよ」

「いいから」

「でも

「俺が行くつづってんだから、わざとどけよ。」

つい大きな声になつてしまつた。

俺の声でその場がしんとなる。

倒れている奈緒を見る。

「ちつちええなあ」

頭と腰の下に手を入れ、持ち上げる。

その軽さと、女の特有のあのやわらかさと、思わずどきどきする。

なんだか奈緒のことを見たくなりなくて、ぐるりと背を向けて、俺はさつさと歩き出した。

保健室のドアには、不在とかかれたカードが掛けてあった。

どうしようか少し迷ったけれど、とにかく横にしてやるかと思ひ、そのまま保健室に入った。

奈緒をベッドの上に降ろし、布団を掛けてやる。

静かな時間だった。

横になつて、幾分顔色が戻ってきた奈緒に、少しほほとする。

窓から射し込む光が当たつて、奈緒の髪がとても綺麗に感じられて。

ナリコとそれに触れてみた。

「奈緒」

もじりぐ、返事は無い。

「奈緒」

その続者は、言つてはいけないよつな氣がした。

たとえ誰も聞いていないとしても。

言つてしまつと、たぶんもつめる事ができなくなるから。

「ん・・・・

ぴくつと奈緒の眉が動き、それからひくつと奈緒は田を覚ました。

「・・・わたし・・・・」

「大丈夫か、奈緒」

「翔ちゃん・・・?」

まだ夢と現実の境目にいるよつな、そんな顔をしている。

「お前倒れたんだよ。みじとごボールが頭に当たって」

「ん」

びいやら思ひ出したらじい。

「……今まで・・・翔ちゃんが運んでくれたの?」

「まあな。かなり重かつたし」

いつもみたいに言ひ返してくれるだらうと思つていたのに、何も言つてこない奈緒。

「おー、なに泣いてんだよ?...どこか痛いのか?」

久しぶりに見た奈緒の涙。

「翔ちゃん、私、何か嫌な」としおりったかなあ

奈緒がゆっくりと体を起します。

「は?」

「体育の時間、翔ちゃん私のこと無視した

「それは・・・そんなこと、ねえし」

「したもん」

「・・・」

「翔ちゃんに嫌われるの、私嫌だよお」

そんなこと言ひなよ。

変に期待したくなる。

「翔ちゃん、翔ちゃん」

「ん」

「翔ちゃん、私のこと、嫌いにならないで」

そんな顔させたいわけじゃないのに。

奈緒の涙が見たいわけじゃないのに。

「・・・ならないよ。奈緒のこと、嫌いになんかならないから

いつも笑っていて欲しいの。」

奈緒を泣かせてしまつてこのは、俺の、奈緒のとは違う想いで。

今だつて、ほんとせ抱きしめたくてしうがないんだ。

その小さな体を、自分のものにしてしまったくてビリうつもない
のこ。

でも、俺は幼馴染だから。

ただ、手を優しく握つた。

「じめんな。奈緒」

もしかすると、こいつこの関係を壊してしまつ口がくるかもしれな
い。

そしたら、やっぱりまた奈緒は泣くのかな。

「じめんな、奈緒。

奈緒のじじ、好きでじめだ。

6・パラソル

6・パラソル

七月に入った。

なかなか梅雨が明け切らず、どんよりとした雨降りが続く。

放課後、靴を履き替えていると翔ちゃんに会った。

「あ、翔ちゃん」

「よつ。帰んの？」

「うふ。翔ちゃんは？」

「俺も

もうすぐ期末テストが始まるから、図書室で勉強してから帰る人も結構多い。

でも、私も翔ちゃんも、家以外で勉強するのはあまり好きじゃない（というか、勉強が好きじゃない）。

お互い一人だつたから、一緒に帰ることにした。

サアサアと、細かいミストのような雨が降っている。

「雨、止まねえな」

「やうだねえ」

言いながら傘を広げる。

私の傘はパステルピンクで、翔ちゃんのは飾りつ 気の無い紺色だつた。

並んで歩くと、いかにも女の子と男の子といつ感じになるんだろうなと思い、ちょっぴり嬉しくなる。

雨が、二つの傘を優しく叩く。

「翔ちゃんテスト勉強してる?」

「当たり前」

「えーしないでよ」

「嫌だね」

「ま、翔ちゃん、今度赤点取つたら古典ヤバいもんね」

「・・・」

翔ちゃんは古典が大の苦手なのだ。

「でも、テスト終つたら夏休みだ」

「・・・やうだな」

「翔ちゃん、夏休みどつか行つたりするの?」

「んー、まあひやん家へりこかな。お盆にな。奈緒は?」

「わかんない。でもたぶんびっか行くと細ひつ」

「そつか

「うん」

少しの間会話が途切れる。

でも、この何も話していない時間も結構好きで。

翔ちゃんの方をちらりと見ると、紺色の傘だけしか見えなかつた。

「祭り、一緒に行くか?」

「え?」

いきなりで、少しびっくりする。

「テスト終った日の夜に花火大会あるだろ？」

「やつなの？」

「なに、お前知らないのかよ」

おくれてんな」と得意げに笑う翔ちゃん。

軽く馬鹿にされているけれど、やつぱりすいへん嬉しくて。

「で、どうすんだよ」

「行くー。」

「よー」

テスト、がんばらなきゃな。

早く終わってくれないかな。

急に楽しくなって、少しだけ翔ちゃんに近づいた。

「うひ、ポンと傘回すが当たつて。

「うひさ」と叫んで、また別の場所に戻った。

「足の距離をはさんで歩くべ、私と翔ちゃん。

匂、早くせぬかな。

7・花火

7・花火

帯が、少し苦しいな、なんて思つ。

テストが終つて、一旦家に帰つた。

待ち合わせ十分前にやつと浴衣を着終わつて、急いで川原の土手の方へ向かう。

広い川に面したそこは、もう沢山の夜店が並んでいた。

カラソコロンカラソコロン

ぞうりが軽やかな音をたてるが、履いている足は、実はものすごく痛い。

やつぱりジーンズとTシャツにじとナゴよかつたかな。

そんなことを思つてこらつちに、待ち合わせ場所の階段の所に着い

た。

翔ちゃんはもう来ていて。

浴衣ではなかつたけれど。

あつさりと着こなしたブルーのワイシャツがやけに似合つていて。

「おせえよ」

言葉とは正反対の優しい笑顔。

たぶん私はいま、ものすごく赤くなっている。

「遅くなつて」「めぐね」

下を向いても「おせえよ」。

こんな顔見られたら、きっとからかわれるに決まつてゐるもん。

「浴衣」

「あ、うん。慣れてなくて。これ着てたら遅くなつた」

「ふうん」

言ひながら、翔ちゃんが私の髪をそりつて撫でる。

少し驚いて、ぱっと上を向く。

「いいじゃよ。似合ひしる」

それま、女の子に向かふ言葉のようつで。

甘く私を憐れむせる。

麻酔のよひ。

つい、酔われてしまつた。

「な、なに言つてさのー。じつはこの女の方も、回りよつなかつた。
つてゐんだしな」

ふい、と翔ちゃんに背を向ける。

私にだけ、なんてあり得ないから。

「わたくかなリップサービスだよ。ありがたく受け取れ」

ほひね。

ああ、むづ。なんで翔ちゃんみたいなの好きになつちやつたんだろ。

「馬鹿なこと言つてないで。私力キ氷食べたいんだから」

一人で歩き出す。

顔を、見られたくなかった。

今は、たぶん泣きそうな顔をしてるから。

「ほひね」

相変わらず笑いながらつっこむ翔ちゃんが、心中で「バカヤロ
オ」と呟いてやった。

力キ氷を食べた後、ゆつぐりと色々な屋台をまわった。

焼きそばも食べたし、海老せんも買つた。

翔ちゃんは、昔のアニメのお面を賣つて、頭につけて賣んでいた。

でも、どの時も、決して恋人のように手を繋ぐことはなくて。

だけど私は、ものすくへ幸せだったんだよ。

「あれえ、中村くんじゅん……。」

「あ、ほんとだ~」

知らない声が翔ちゃんを呼び止める。

振り向くと、少し派手な女の人が一人。

「よお。久しぶり」

「久しぶり～！元気だつたあ？」

「まあな」

誰だろう、この人たち。

私がそんな顔をしていたのだろう、

「あ、あたし中村くんのモトカノでえす」

目が合つた片方の女の人が笑いながら言つた。

それを聞いて、大体予測はできていたけれど、やっぱり複雑な気持ちになる。

「中村くん、その子だれ?」

「え、ああ。奈緒つていつの」

「中村くんの新しい彼女とか?」

『彼女』といつ言葉に、少しだけキツとする。

「あ~違う違う。ただの幼馴染だから」

「あはーだよねー。だって全然中村くんのタイプじゃないしー。」

「たしかにいー!」

ギャハハと大きな声で笑うモトカノとその友達。

そのときは、翔ちゃんのことを見ることなんてできなかつた。

「私、帰る」

「こんな所にいたくないよ。」

「え、奈緒？！」

走り出した私に、翔ちゃんたちの驚いた声が聞こえた。

それでも私は止まらなかつた。

カラソプロンカラソプロンカラソプロン

うまく走れない。

浴衣なんか、着てくるんじやなかつた。

カラソプロンカラソプロンカラソプロン

どんなに頑張つたつて、私はあの人たちみたいに大人っぽくなんてなれないのに。

どこかで、今日だけは、翔ちゃんは私だけを見ててくれるかもしきないって思つてた自分がいて。

カラソプロンカラソプロンカラソプロン

せめて今日だけは、一人でいたかったよ。

幼馴染だつてことを忘れて。

「奈緒！待てよ。」

さつきの場所からそんなに離れない場所で、翔ちゃんが私の腕を掴んだ。

「どうしたんだよ、急に」

「放してよ」

「離してくれなきゃわかんないだる」

「放してつづばー。」

思い切り腕を振り、翔ちゃんの手を振りほどく。

「なんでも……ないから……」

「なんでもないわけないだろ」

翔ちゃんが、困ったよつに一つため息を吐いて、顔を覆っていた私の腕を、再び掴んだ。

「お前泣いてんじやん」

まばたきをする度に、ぽろぽろと涙が頬を下りた。

一度溢れ出したそれは、もつひとつもなげて。

「翔ちゃんは、何もわかつてないよ」

「なんの」と、

「――――――

「翔ちゃん、私は翔ちゃんのこと……！」

ドーーーン！

夜空に打ち上げられた、真っ赤な花火。

その大きな音に遮られて、私の言葉は結局誰にも伝わることはなかった。

私と翔ちゃんは、そのいきなりの大輪に、ただただ夜空を見上げていねじとしかできなかつた。

私の想いは、花火にさえも隠されて。

やつぱり伝えるべきじゃないんだって。

そつ思つと、なんだか笑えた。

「奈緒・・・？」

「ううん。翔ちゃん。なんでもないの」

いろんな色の光が、私と翔ちゃんの顔を照らす。

相変わらず涙は止まらなかつたけれど。

夜空には沢山の花が咲き乱れていた。

8・会員（前書き）

この辺りから奈緒と翔の関係が変化してこきます。
よかつたら読んでください

8・合コン

8・合コン

「奈緒その髪型超カワイイ」

夜の七時。

加奈がお化粧バッカリの顔で微笑みかける。

「奈緒、今日はタカシに頼んでいい男を集めてもらつたから。N高だよ？！頭良し、顔良しつて、もう言つことないしー。しっかり彼氏ゲットしなきゃね」

「うふ、ありがとう」

興奮気味の小百合。今日は三対三のコンパなのだ。

「でもや、奈緒から合コンしたいなんて初めてじゃない？」

「そ、そりがな？」

なんだかもう、ちょっとぴり疲れちゃったんだよね。翔ちゃんを想い続けるのが。

私も彼氏とか作つたら、忘れられるかなって思つてさ。

「あ、来た。あれじゃない？あの三人組。」

手を振る小百合に向こうも気がついたみたいで、爽やかに笑いながらこちらへやって来る。

三人とも、育ちの良さそうな、エリート王子様。

出会えたところだ、近くのイタリアンレストランへ。

通されたテーブルに適当に向かい合って座る。少し賑やかな、でも
煩すぎない、感じのいい店内だった。

まず、自己紹介を軽くして、運ばれてきた料理を食べながらお互いの学校のことなどを喋る。

相手の子たちは、頭も良くてお金持ちで、その上かっこいいのに、

そんなこと全く鼻にかけることなんてなくて、本当に好感の持てる人たちばかりだった。

「ペペロンチーノお持ちしましたあ」

ん? どこかで聞いた声。

ふと顔を上げるとそこにはウエイター姿の翔ちゃんが。

「あ」

一

こういう場では会いたくなかった。

「中村くんじゅん。なに? ここでバイトしてんの?」

「違う違う。今日はちょっとダチに頼まれて代理」

「そつかあ。おつかれえ」

少し長めの茶色い前髪が、ピシッとした制服とはちよつぱりミスマ

ツチで、なんだか翔ちゃんになつて思つた。

「てか桜井も藤井も超キレイ。合コン中?」

「わいだよ。中村くんだつてその制服かなりイケてるよね」

「さんわー」

やつぱり女の子の扱いに慣れてるなあとか思つて、ため息を小さく吐いたとき、ふと翔ちゃんがこっちを向いて田中が合つた。

「てか奈緒が合コンとか。普段色気ねえからなんかおかしいかも」

ふっと鼻で笑つたり、「翔ちゃんは言つた。

「髪型とか、かなり気合入つてんじやん?」

面白がる口調とは反対に、細められた田中はなんだかすゞぐ冷たくて。

なんで、そんなこと無いの?

恥ずかしくて、なんだか居た堪れなくて、思わず田を瞑り下を向く。

ああ、もう最悪。

翔ちゃんに言われたことで、更にキシイ。

「僕は、普段からお洒落に気をつかつてゐる子も良いこと思ひナビ、特別な日にだけ頑張る子も可愛いく思ひナビ」

その言葉にぎりと顔を上げる。

田の前に座つてゐる高の岡の女子様。西田へんたつていつたつけ。

「それに、相模さんはすく魅力的だと思ひナビ」

優しく微笑む西田和也、思わず赤面してしまつ。

「『注文は以上でお揃いですか。では、』『おつかれさまで』

いきなり翔ちゃんは営業の顔に戻つて、伝票だけ置いてかわると廊房の方へともどつてこつてしまつた。

それから既にまた色々喋つて、十時くらいに今日せじれでオヒラキにしようとつけてなった。

店を出で、それぞれ帰つ道に別れる。私は西田くさんと同じ方向だつた。

夜の道で一人並んで歩く。

「相模さんつて、彼氏とかいないの？」

「いなこよ。いたら合コンとかしないって」

「え～こんなに恋愛このに

「もあ。向にも出ないよ？」

「今日や、もつじつかに泊まつてかない？」

「え？」

泣かぬつてへえ?

「シたい。相模さんと」

・・・。

あぬつて向を、なんて聞かなー。こんな展開でやる」といつて叫んだ
ら、一つしかなじやん。

「べ。」ぬご。今日せわひにねやせ

「こいじやご。金なりゆかひれ」

「」ぬご、せごと無理・・・

なんか怖くなつて離れよつとしたが、腕をぐこと掴めた。

「嫌な思ことしかせないかられる」

「やだつてば、」

「なあにやつてんの？」

ぱっと声のほうを向く。

「翔・・・ちゃん・・・」

「なんだよ。邪魔すんなよ」

「そいつはやめといたほうがいいって。しっかり見てみ？胸とかまつたくないじやん。絶対満足できなって」

・・・ちよつと傷つくんですナビ。

「は？おまえには関係ないだろ。どっか行けよ。」

そう言つて、私の腕を掴む西田君の腕が更に強くなる。

はあー、とため息を一回。

その後翔ちゃんはズカズカとこちらへ歩いてきて、

がつん。

西田君が顎を押されてしゃがみこむ。

「やめやつてんだから、一回ではなせや、このヤロホ」

西田君がギッと睨んだが、翔ちゃんの方が強かつたみたいで、目が合つなりぱっと向いてしまった。

「ほり、帰るぞ、奈緒」

ぎゅっと手を握られて、思わずドキとする。

「めんね、と小さく呟いて、私も西田君に背を向けた。

「お前、馬鹿か。夜道で男と一人きりになつて何考えてんだよ」

「だつて……」

「それとも、ほんとは襲つて欲しかつたとか？」

「な・・・・！ そんなわけないでしょーすつじぐく、怖かつたんだから・
・」

思わず涙が溢れて、足を止めてしまった。翔ちゃんも、ぴたりと進
むのを止める。

手は、つないだまま。

「「」めん。悪かったよ」

「・・・・ひうん。助けてくれて、ありがと」

そして再び歩を出す。

「 もう少コンなんですねんなよ。男なんてみんなあんなんだから」

自分でついて、何回もしてくるせに。

「合コンなんかじゃなくて、もつと自然に好きな奴ができるの待てるよ」

「・・・好きな人くらい、もういるもん」

そう言ったとたん、今度は翔ちゃんが足を止める。後ろを歩いていた私は、思わず翔ちゃんの背中にぶつかってしまった。

「いた」

「・・・だれ、それ」

「え？」

「お前が好きなのって、誰だよ」

「い、いえるわけないじゃん！ そんなの、翔ちゃんには言えないよ」

言つたら翔ちゃん、私のこと嫌いになつたやうでしょ？

「・・・」だから、一人で帰れるだろ

するりと離れていく翔ちゃんの手。ぱっと踵を返して、再び街の方へと歩いていく翔ちゃん。

「え？ ちゅうとー翔ちゃん? ..!」

私、何か変なこと言つた?

私の声に振り向くことなく、そのまま遠くへと消えてしまった。

今までつないでいた右手を見る。そこだけ、ほつと熱をもつているみたいに熱い。

でも今は夜の空気に晒されて、すつと冷たくなつてこく。

涼しい夏だなつて思つ。

翔ちゃん、好きな人は、翔ちゃんだよ。

ちょっと優しくされて、ずっと手をつないでいられるような気がして、だから余計寂しくなるの。

『気づかれてないよね？』

ちやんと、ただの幼馴染でいられるよね？

たまに不安になる。

この気持ちに気づかれてしまったが、せつと翔ちゃんは私から離れて行ってしまうから。

私の右手にせ、もう翔ちゃんの手の感触はほとんど残っていないかった。

えりも。

木村よしです。

このままでこいつかの短編の集まりって感じでしたね汗。
でも一応、ここから物語が発展していく予定です！

小説連載続けていけるのは、皆様がよしの作品を読んで下さるから
です。

このままで読んでくださっている方、本当にありがとうございます！
これからも『翔ちゃん』によみこへ『おじいちゃんへお願いいたし
ます。

9・ノート

チャイムが鳴って、賑やかになつて、これはいつもの喧下がり。

パンペーイで買つてきたパンに歯づきながら、加奈は機嫌が悪かつた。

「昨日は乙圖つてこいつから監紳士なんだりうなあつとか思つてたのに、結局頭の中はやうぐくさんのペーマンと回じだつたわよー。」

昨日のあの合戦への帰つ、加奈と小畠合もせつぱりホテルに誘われたりしへ。

「思いつひとつ急所蹴飛ばしてやつたわよーね、加奈」

「さういたり前よ。出合つてすぐとか有り得ないもん」

話を聞いていて感心しちゃう。やつぱつ女の子も自分の身は自分で守れないといけない時代だもんね。

「奈緒も誘われたんでしょう？」

「あ、うん」

「奈緒、大丈夫だった？ 奈緒なんて特に弱そうだし、しかも一人だつたじゃない、あの時」

「よく無事だつたわねえ」

「実はね、たまたま翔ちゃんが通りかかって、助けてくれたの」

翔ちゃんが現れたとき、ものすくホッとしたのを覚えてる。

「中村くんが？」

「うん」

「うひそー超かつこいいじやん、それ」

興奮気味の小百合。

実際、かなりかつこよかつたもん。

「奈緒と中村くんってたしか幼馴染だったよね？」

「わいだよ」

「いいな～あんなかつこ～のと幼馴染で～」

「やうかな」

曖昧に笑う。

私は小百合たちの方が羨ましいよ。

翔ちゃんにとつての、女の子、じいられるでしょ？

「てか、奈緒と中村くんって付き合っていないの？」

「え？！」

いきなり何言い出すんだか。

「うひつむき合ひてゐるわけないじゃん。幼馴染だよ？」

変な噂が流れて、もしも私の気持ちが何らかの形で翔ちゃんに知られてしまつた。

もう、一緒にいられなくなる。

「でもや、奈緒は中村くんの」と好きじやん？

「や、そりゃ普通に幼馴染だし？嫌いじやないよ」

早くこの話題終れ。

「違つて。奈緒は中村くんの」と、駄の子として、好きなんだよねつて」と

「ち、ち、違つてー勘違いだつて

お願ひ。

「これは、私だけの気持ちなの。」

「嘘ー、絶対好きだつて」

「ちが」

「奈緒は中村くん一筋だも」

「翔ちゃんなんて好きじやないよーー。」

思わず大きな声を出してしまった。

唚然とする小百合。

「な、奈緒。」「めん、ちょっとからかいすぎ」

「あ・・・中村くん・・・」

「え」

しまつたところ、いつの間にか加奈の視線の先を振り返る。

翔ちゃんが、立つてた。

「翔ちゃん」

「「」れ、借りてたノート。返すかい。それかな」

ノートを机の上に置き、翔ちゃんが足早に教室を出て行く。

「翔ちゃん待つてー。翔ちゃんー！」

どんなに呼んでも、振り向いてくれないことは分かつてた。

でも、追いかけることなんてできなくて。

「奈緒……」「めぐ……」

「「」めん……」

「・・・一人が、悪いんじゃないよ・・・」

だつて、結局自分を守るために書いた言葉でしょう？

本気で好きだなんて知られたら、嫌われやつる。

でもさ、なんで？

好きって言わないかわづて、あつて、もっと翔りやんを傷つけた。

「あのせ、こんなときにナンなんだかど、中村くん、昨日たまたま通りかかったんじやないと思つ・・・」

「え？」

何書いてんの？小町。

「ううが店を出のよつ！時間へりへ前に、もうバイトおがつてた
も」

「奈緒？！」

気がついたら走り出していた。一つ下の階の翔ちゃんのクラスまで。

え。うそだあ・・・

ほんとだって。私たちがまだ楽しくやつてたとき、私服に着替えた中村君が出て行くの、私見たんだ

ドアを勢い良く開けると、反対側の枠に思い切り当たつてしまふ音がした。一瞬教室の中がしんと静まり返る。

翔ちゃんは、机に突つ伏して寝ていた。

「翔ちゃん、翔ちゃん！」

袖を何度も引ひ張ると、ゆりくじと頭が持ち上がる。

「私と田が合った瞬間、翔ちゃんは眉間に深い皺を入れてすぐ不愉快な顔をした。

「・・・なに」

「翔ちゃん、昨日私のこと待っててくれたの？」

「・・・」

「ほんとは、バイト結構前に終つてたんでしょ？私全然知らなか

「なし、勘違いしてんの？」

翔ちゃんの田が、スッと細くなる。

まるで私を嘲るかのように。

「バイトは確かに早く終つたけど、別にお前を待つてたわけじゃない

い

「・・・」

「昨晩お前が誘われてたといふと、ほかの奴と行ってたんだよ」

私が誘われていたといふ。

昨日の晩、私が連れて行かれそうになつた、ああいう場所。

「たかが幼馴染を、わざわざ心配して待つわけないじやん」

「ああ、もひ。なにやつてんだろ、私。

変に期待しちゃつて。

一人でテンパつて。

私はただの幼馴染つてこと、忘れたわけじゃなかつたんだよ？」

自分の教室に戻ったとき、私の顔を見た加奈と小百合が駆け寄ってきて、二人に抱きしめられながら、声を殺して少しだけ泣いた。

10. キラキラライ

10. キラキラライ

『翔ちゃん』

いつか、いつまで呼んでたっけ。

『奈緒』

そつぱれるのは、もつぱたつ前だと思つてた。

翔ちゃんと私は、もう気がついたときには一緒に遊んだ。

同じマンションだとこいつもあつたんだと思つ。

親同士も仲が良くて。家族ぐるみの付き合いでやつ。

でもそれは、漫巻なんかにあるよつな、将来結婚しようつてつて、仲では決してなくて。

真夏の太陽の下で、夏休みは毎日一緒に遊んだ。

私は小さな頃からじんぐくで。

いつも前をいく翔ちゃんの背中を必死で追いかけてた。

一生懸命走っているときには、何も無いのによく泣いていた。

その度に、前を歩いていた翔ちゃんは私のところまで戻ってきてくれて、

「大丈夫か？奈緒」

そう言つて、すっと手を差し伸べてくれた。

そのときの翔ちゃんの手は、汗でちよっぴり濡っていたけど、私はそれがなにより優しく感じられたんだよ。

あの後、翔ちゃんは一度も顔をあわせること無かった。

そのまま家に帰つて。

畠田学校行きたくなくなつて思つて。

でもやつぱつになつて、早く会つて、しっかり謝りたいとも思つたつ。

翔ちゃんなんて好きじゃなによーーー。

頭の中によみがえる、私の声。

翔ちゃん。

そんなの、嘘なんだよ。

私の本当の気持ちよ、わづ翔ちゃんから離れられないつっこつのこと。

でも、そんなじと、翔ちゃんが泣くはずも無くて。

昨晩お前が誘われてたといふに、ほかの奴と行ってたんだよ

田畠が、しゃうにな。

たかが幼馴染を、わざわざ心配して待つわけないじゃん

そんなこと、もう分かつたつもりなのに。

びひっ。

あいへ苦じこよ。

携帯を開く。

ディスプレイの中で、ムカシクべりこ輝いてる。ちやんが、瞬きをしながらいちを見つめている。

アドレスのボタンを押して、翔ちゃんのメールアドレスを引っ張り出していく。

Eメール作成のところにカーソルを合わせて決定ボタンを押す。

なんて打とく。

言いたことは沢山ある。

でもその大半が言つてはいけない」と。

結局、今田は「めんね、とだけ入力してから送信した。

携帯を閉じながら息を吐いて、ベッドの上に寝転がる。

電気の光が直に田に入る。

蛍光灯の光はきらり。

あまりにも白ずかしく、すこし青いよりも感じられて、なんだか怖いから。

目を閉じても、わずかな光は瞼を通り越して私を突き刺していく。
しばらくしてから「『お食事』とお母さんの呼ぶ声がして、電気を消して部屋を出た。

携帯は持つていかない。

充電器に立てて、それはわずかな光を放っていた。

ご飯を食べている間、メールがきてるだらうかと気になつて、やはり持つて来ればよかつたと少しだけ後悔して。

でもその晩、翔ちゃんからの返事は、といといひ返つてへるひとはなかつた。

11・『奈緒』

11・『奈緒』

地球は別に、私を中心に回っているわけでは決してなくて。

だからもちろん、次の日はいつもと変わらず普通にやつてきた。

学校に行くと、加奈と小百合が大丈夫だつた？と心配そうに聞いてきたから、大丈夫と言つて曖昧に笑つた。

昨日の晩は、来ないメールをずっと待つて、ほとんど寝ていない。

二人は相変わらず申し訳なさそうな顔をしていたけど、敢えてそれ以上はなにも言つてこなかつた。

お昼休み、お茶を買いに中庭の自販機のところへ歩いていく途中、翔ちゃんに会つた。

一瞬目が合つたけれど、何て言つていいのかわからず思わず視線を

そりしつしまつた。

はあ。

私の馬鹿。余計感じ悪くなるだけじゃん。

「血販行くんだろ？早くした方がいいぜ。かなり並んでる」

え？

ぱっと顔を上げる。

そこには、こつもと変わらない、おじけたよつな翔ちゃんの顔。

昨日のこと、もう許してくれたんだ。

なんだかす、くほつとした。

もう前みたいに喋れなくなっちゃうのかなとか、かなり怖かったから。

「え？ そうなの？」

「バスケ部が休憩に入つたからな」

「やつかーじゃあ早くしなべちや売り切れちゃうかも」

「わざわざ他の部活も休憩に入るだい」

「うわ、ほんとだ。ありがと。じや、それわ行くな

「ねむ」

軽く手を振つて翔ちゃんの横を通り過ぎる。

「あ、そつだ、相模」

・・・あれ?

後ろを、振り返る。

「ん、どうした?」

「今、相模つて・・・?」

「あー呼んだけど。」

「え、な、んで? 翔ちゃん」

「俺たちって、別に名前で呼び合つうつな仲じゃないじゃん?」

「え、でも今まで」

「ほかの女の子と付き合つたうするとき、色々不便なんだよね。だからわ、相模もこれから俺のこと苗字で呼べよ」

なに、それ。

「昨日のことで、せっぱり怒つてゐるの? 私は翔ちゃん」

「中村

訂正され、ぐっと黙る。

かへ、お前で浮び合ひにいひやが、許されないの?

「じゅ、ナウニヒーとだか」

翔ちゃんは手をひらりと振ると、田もあわせずに私の横を通り過ぎて行った。

私は、それを動くことができなくて。

お財布をただ握り締めていた。

「ミホつて、また中村と戻つてたの?」

中村とこいつ前に、思わず顔を上げる。

そこには、少し前に翔ちゃんと付き合っていたミホちゃんと、その友達がいて。

「ん~ヨリ戻したつてわけじゃないんだけどねえ。でも、名前で呼んで良いって言つてもらえたから、前よりちょっと進歩かもね」
え?

よく内容が分からぬ。

「やういえば、前中村と付き合つてたときは、絶対苗字でしか呼び合つてなかつたもんね。あれなんで?」

「なんかあ、『俺のこと名前で呼ぶのは、特別な奴だけだから』、とか言われちやつてえ。そのときはちょっとシヨックだつたなあ」

ミホちゃんとその友達は、その後も楽しそうに喋りながら校舎内に戻つていった。

『俺のこと名前で呼ぶのは、特別な奴だけだから』

そんなこと、ひとつも言つてくれなかつたじやん。

そんなこと、全然知らなかつたもん。

私つて、翔ちゃんにとつて『特別』だったの?

翔ちゃん。翔ちゃん。

もつ私は、そつ呼ぶ資格はないのだけれど。

翔ちゃん。翔ちゃん。

わへ、じめんねも伝えられないのね。

翔ちゃんことひー、私がどうこう存在だったかは今もわからない。

でも、私と翔ちゃんは幼馴染で。

それは、ほんとは、とっても大切なことだつたんだね。

好きだなんて、もついいの。

私だけを見てて欲しいなんて言わない。

だから、もしも願いが届くなら。

もう一度だけ、奈緒つて呼んで。

12・モモちゃん

シャカシャカシャカシャカシャカ

今さつもの部活で使ったお鍋を洗う。

菊池くんが少し焦がしてしまって。

なかなか落ちないじゃない。

「奈緒先輩！」

「わっ…」

背後からいきなり、にゅっと後輩のモモちゃんが現れて、びっくりして思わずスポンジを落としそうになる。

「どうしたんですか～？そんな口つい顔しちゃって

「え？」口つい顔してた？私

「はー。 ものすいへへ」

金井桃香。

モモちゃん。

一つ年下の料理部の後輩。

モモちゃんはいつも明るくて。

そんなモモちゃんを見ていると、少しだけ元気になる。

「先輩最近元気ないから・・・モモ心配だなあ」

「大丈夫だよ。 何にもないから」

「悩みとかあつたら、絶対モモに相談してくださいねー。」

「はーい。 ありがとね、モモちゃん」

「いいえー。モモは奈緒先輩大好きですかーりー。」

ああ、もう一人の女性さんは可愛いなあ！

「私も大好きよ、モモちゃん」

「ほんとですか? じゃあ、ちょっと先輩に頼みたいことがあります
けど~」

いきなり上田遭にになるモモちゃん。

調子がこことまゝうつこつとをぬつのね。

「なあに？モモちゃん」

「奈緒先輩つて、中村先輩と幼馴染ですよね？」

「え・・・」

中村。 中村翔。 翔ちゃん。

その名前を聞いて、思わず表情が曇る。

あれから、一度も翔ちゃんとは喋っていない。

たまに見掛けることはあっても、どうしても呼びかけることができなかつた。

だから、今はあんまり翔ちゃんのことを思って出でなこよつとしているのに。

「アリド、コレ…中村先輩に渡して欲しいんです！」

モモちゃんは、ポケットから一枚の手紙を取り出して私に差し出した。

「これ…・・・」

「…わざわざフレターつけてやつた」

照れる様に笑つモモちゃんは、女の私からみてもかうへ向處へて。

だから尚更、複雑な気持ちになる。

「モモは実は、中村先輩に一田惚れしちゃこませたー。」

モモの言ひ方の中村はやくはひじく幸せんひだ。

恋してますってかんじで。

私も、翔ちゃんのことが好きなんだよ。

だから、『めんつて』。

モモの言ひたいの。」

言えない。

言えないよ。

断る理由なんて、私には無いんだから。

「私・・・」

「先輩？渡してくれないんですか？」

急に悲しそうな顔で私を見てくる。

まるで子犬のようだ。

私が到底敵いつこないくらい、大きな可愛らしい瞳をしていて。

「・・・わかった。いつになるか、わからないけど・・・」

「わ～！ありがと、先輩！やつぱり奈緒先輩って超優しい！」

言いながら、ギュッと抱きついてくるモモちゃん。

「中村先輩、OKしてくれるといいな」

モモちゃん、「めんね。

やつぱり応援はできないけど。

でももしかしたら、翔ちゃんはモモちゃんを好きになつて、二人が付き合うことになるかもしれない。

そしたら、その時はちゃんと、おめでとつて言ってあげなきゃ。

それまでに、少し時間がかかるかもしれないと。

また、前みたいに『翔ちゃん』って呼べる日がきたら。

笑顔で、おめでとつて。

13・菊池くん

13・菊池くん

はあ。

これで何回目のため息だろ？。

モモちゃんから預かつた手紙とにらめっこ。

今日も部活で学校に来ていって。

午後六時をまわった今、校内には、もつほとんじ誰もいない。

あれから二日経つたけれど、手紙はまだ渡せていない。
いや、できればこのまま渡したくないんだけど。

最近、翔ちゃんを見かけない。

夏休みの補習にもほとんど顔を出していないらしい。

“やつしたんだね、とか思っててしまつたり。

たとえ姿を見かけたとしても、前みたいに気軽に話しかけることは
んてできないのに。

ヒグランの声だけが、静かに響いている。

私もそれから帰らつかなと、鞄に手紙を閉まつたとき、ガラリと教
室の扉が開いた。

「あれ、相模先輩まだいたんですね？」

そこには、きょとんとした顔で立つてゐる菊池くん。

菊池忠義。

菊池くん。現在一年生の、これまた料理部の後輩。

「菊池くん」

「俺、今から帰るところで、たまたまこの教室の前通りかかつたら
先輩がいて。勉強ですか？」

菊池くんは、翔ちゃんと違つて結構真面目だったりす。

「ひくん、ちがつかがつ。ちよっとね、忘れ物」

モモちゃんからメールを預かってるとせ、やつぱり言わない
ほうがいい。

「ちつこな時間。早く帰んなくせや、すべに暗くなつちま」

言いながら、菊池くんの立つてこる扉の方へ歩いていくと、ぎゅつ
と腕を掴まれた。

少し驚いて、菊池くんの顔を見る。

「菊池、くん？」

「相模先輩。少しだけ、いいですか？」

夕焼けに染まる菊池くんの表情が、あまりにも真剣で。

なぜか喉が渴いたようで、ぐいぐい、と音がした。

菊池くんは、後輩で。

モモちゃんも同様、私の可愛い後輩で。

ただ、それだけだったのに。

それでも、今はじめて、目線を合わせるには見上げるしかないって
ことに気がついて。

菊池くんは、私とはちがう、男の子なんだって。

だから、私の腕を掴む手は、こんなにも大きくて。

思わず、下を向いた。

「先輩」

「・・・なに?」

「先輩は、中村翔つて人の恋人なんですか？」

モモちゃんも菊池くんも。

私と翔ちゃんって、周りにはそんな風に映っていたのかな。

でもこのことを聞いたら、きっと翔ちゃんは馬鹿にしたように笑う
んだろうな。

「そんなわけ、ないじゃん。ただの、幼馴染だから」

「じゃあ」

私の腕を掴む力が、少しだけ強くなる。

「俺と付き合つてください」

ヒグラシの声だけが、ただ、響いていた。

「・・・」

ねえ、私はじつたまここにいるんだ。

「相模先輩、ずっと好きでした」

このまま、菊池くんにさがりついてしまえたら、どんなに楽だらう
と。

「・・・ありがと」

翔ちゃんのことを想いながら泣いたら、もう泣くことなんかないのだと。

「でも・・・」ぬる

わづ、翔ちゃんのことを想い続けていたも、その先には何もなこと
このまま。

「ふー、考えかねてぬる

やつ思ひても、それじゃあさつと幸せになれないなんじ。

そんなふうに感じるのは、

ねえ、翔ちゃん。

どうして？

14・夕焼け

14・夕焼け

あの後菊池くんは、返事はそんなに急がなくていいからと言つて、先に教室を出て行つた。

半分空が暗くなつた頃に、私も学校を出た。

門の扉は、半分はもう閉まつていて、たぶん私が最後の生徒なんだろつた、なんて思う。

だから、帰り道に翔ちゃんの背中を見つけたときは、かなりドキリとしてしまつた。

肩から大きなスポーツバッグをかけて一人で歩いている翔ちゃんは、やつぱり私がずっと好きだつた翔ちゃんで。

薄暗い夕焼けに、白いカッターシャツも少しだけ溶けてしまつてい るよつだつた。

ねえ。

この光景は、少し前と何も変わらないの。」

わへ、翔ちゃんと呼んでも、振り向いてはくれないんでしょ。

鞄の端に入れてあった、モモちゃんからの手紙を取り出す。

渡さなきや。

モモちゃんかわいいブレター。

渡したくない。

でも、

渡さなきやこけない。

翔ちゃんのねばにいたいから。

絶対にこの気持ちを知られちゃいけない。

「中村くん！」

タイミングなんて考へないで、ただ足をふんばつて呼んだ。

違和感なく聞こえる、その自然な呼び名が、なんだかものすゞ寂しかった。

「あ、相模。よつ」

「じめんね、呼び止めちゃって」

「いや、俺も丁度相模に言いたい」とあつたし

「私も。私も中村くんに言わなきゃいけないことがあるの」

背中の後ろで、少しだけ手紙を握り締める。

「そりなの? じゃあ相模先に言えよ

「え、いこよ。中村くん先にじめんね」

「いいから言えって

優しく笑う翔ちゃん。

やつぱり好きだな。私。

翔ちゃんのこと、好きだよ。

「・・・じゃあ、これ」

モモちゃんからの手紙を突き出す。

一瞬、翔ちゃんの眉間にしわが寄った。

「なに、これ」

「後輩の、金井桃香って子から。・・・渡してって頼まれたの」

「・・・」

翔ちゃんは、何も言わなかつた。

少しの間、沈黙が訪れる。

ねえ、こんなのは受け取れないって言つて。

ラブレターなんて読む氣なにって、そう言つてよ。

「・・・わかった。わざわざサンキューな

そつ言つて、翔ちゃんはモモちゃんからの手紙を受け取り、そつと
ポケットの中にしまつた。

それはまるで幻のようだ。

夢の一欠片のようだ、私にはどうしても信じる」とのできない光景
だった。

「それだけ? じゃあ、俺帰るわ

くぬつと私に背を向ける翔ちゃん。

「じょ、中村くんの言いたいことって? まだ聞いてないよ。」

でも翔ひやとなは、私の声に振つ返るひとなへ

「何いつかわかった」

やつぱり、あの日のよひに手をひきつて、ゆうべつと、守
んだままの私から離れてこつた。

小ねくなつてこへ翔ひやとの背中が、ぱやつとオレンジ色にかすん
でこへ。

あーあ。渡しけじつた。

わづ、何せひるがだら、私。

れつれと翔ひやんなにて諦めればこじやん。

翔ひやさんじやなくたつて、菊池へとなは、ひやさんと私のじとを見てい
てくれる。

やつあれば、じんなに苦つむじもなこのひ。

でもね、じんなにも涙が止まらないのは。

やつぱり、それが翔ちゃんだからなんだって。

「好きだよ。翔ちゃん」

ずっと先の、むづむづ見えないその小さな後姿に、私はぼつりと呟いた。

15・幼馴染

色々な手続きがあつて、その日は学校に来ていた。

だから、A組の教室の前を通りたときに奈緒の声が聞こえていて、思わず立ち止まってしまった。

午後六時を過ぎた校内には、わいせとさび誰もいないところだ。

その教室の中には、奈緒と、前に見たことのある菊池とかいつ一年。

窓から射し込む重いほどの夕焼けが、ビルの影を鮮明にしていた。

だから、奈緒としつが、ただの先輩後輩の会話をしている感じがないつて。

その艶やかな空間は、そんなくだらない話をしてくる感じがないつて。

もう、菊池が奈緒に気があることくらい、ずっと前に気付いていたのに。

盗み聞きは、良くない。

でも、聞かずにはいられなかつた。

「菊池、くん？」

「相模先輩。少しだけ、いいですか？」

菊池の、奈緒の腕を掴む手が、やけに目にしつく。

奈緒に、触れるなよ。

「先輩」

「・・・なに？」

一瞬、菊池と目が合つたような気がした。

ガラス一枚を挟んだ、その短い距離で。

「先輩は、中村翔つて人の恋人なんですか？」

挑むようなそいつの口に、今はどうしても勝てるような気がしなかつた。

この先は、聞きたくないと思つた。

でも奈緒は、せうつと言つてしまつんだよな。

「そんなわけ、ないじゃん。ただの、幼馴染だから」

わかつてた。わかつてたんだけどさ。

やつぱり、かなりキツいよ。

「じゃあ」

なあ、奈緒。

「俺と付き合つてください」

なんで俺とお前は幼馴染なんだろ？

ヒグラシの声だけが、ただ、響いていた。

奈緒がどう答えるかなんて、知りたくなかったから。

俺は、そのあと走って学校から出た。

それはまるで逃げるようだつたかもしれない。

あとになつて、かつてわるいなんて思つてみたり。

そのあと、道端で奈緒に呼び止められて、何も知りませんよつて風に振舞つた。

うまくいったかどうかは、わからないけど。

そのときこ、後輩から預かつたとかいう手紙を渡されて。

これが、奈緒の気持ちの全てを物語つてゐるやつで。

正直、ものすいぐへりやいた。

ほんとせ、その田のつひ元気もあたことどがあつたナビ。

でも、なんだかがもうここやつて。

変な同情はしてほしくなかつたし。

「しょ、中村くんの言つたことつてへーまだ聞いてないよー。」

「何言つかられちつた」

「まかすのなんて簡単。

言葉も。

俺自身の気持ちでさえも。

俺と奈緒はただの幼馴染で。

そつ自分自身に言つ聞かせたところで、この想いがどうにかなるわ

けじやないつてわかっているの。」

俺は幼馴染だから、この気持ちを諦めなきゃいけない。

なあ、奈緒。

なんで俺とお前は、幼馴染なんだうつな。

16・忘れ物

16・忘れ物

その日の晩は、なんだかよく眠れなくて。

朝起きて鏡の前に立つと、なんとも言えないような、疲れた顔をしていた。

「ぶつせこくな顔」

顔をばしゃりと洗って、朝食を食べる。

食欲なんて無かつたけど。

むりやりーストを口に押し込んだ。

「奈緒ちゃん、今日学校休みでしょ？」

洗濯物かごを抱きかかえてダイニングに入ってきた母が聞いてきた。

「え

今日は土曜日で、何故か料理部は土日は部活をしないところ決まりがあるらしいへ、学校に行く予定はなかった。

「うそ、やうだナビ

たぶん、何か頼まれるな。

「じゃあ悪いんだけど、お父さんの会社まで、そこへ置くことある封筒持つて行つてあげてくれないかしら」

ほら来た。

お母さんが顎で示した小さな机の上に、ちょうど茶封筒が置いてあった。

大きさからして、たぶん何かの書類だろう。

「なに。お父さん忘れ物したの?」

「わうなのよ。わしあ電話があつてね。奈緒ちゃん、お願ひ

私とお母さんは仲が良くて。

だから尚更断れない。

「わかつた」

ほんとは外になんて出たくなかつたけど。

ジーンズとTシャツに着替えて、封筒を片手に家を出た。

近くの商店街を通り過ぎ、喫茶店などが集まつた駅前の道に出る。

夏で。

田舎しがものすじへ強かつた。

だから、少し前を歩いているカップルが、翔ちゃんとモモちゃんだつて。

いつも気付くのに、少しだけ時間がかかった。

昨日、あの手紙の返事を、翔ちゃんはモモちゃんに返したんだ。

昨日のうちに。

私は、まだ菊池くんに返事をしていないけれど。

その答えがどうだったのかなんて、正直知りたくなかつた。

知りたくなんて、なかつたのに。

目の前を歩く一人の姿が。

翔ちゃんの腕に絡みつく、細く白いモモちゃんの腕が。

そして、とてもお似合いのその後姿が。

全てを私に物語ついていた。

くるつと回れ右をして、会社までの行き方を変える。

あの一人に、会いたくなかった。

二人とも、きっと幸せそうな顔をしているから。

おめでとうって言つて決めたけど。

やつぱりまだ、そんなに強くないよ。

まるで子供のように泣きながら、私は歩き続けて。

通り過ぎていく人たちが、不思議そうに私を見ていいく。

でも、溢れる涙は止まらなくて。

心の奥がぎゅって痛くなる度に、またぽひぽろと頬をぬつ。

翔ちゃん。

中村くんも、もう呼んでこないかな。

やつぱり、もうひとと、心の奥が痛くなつて。

中村くん

昨日の私の声がよみがえる。

わへ、もうあんまりもできないの！」

私はまだ、こんなにも翔ちゃんのことが好きだなんて。

17・ワンピース

17・ワンピース

金井が見たいと言った映画が終わり、外に出る。

入った時はまだ明るかったのに、もう大分外は暗くなっていた。

おもしろかったと、金井はとても喜んでくれて。

素直に良い子だと思った。

昨日、あれから帰つて手紙を見ると、まあお決まりの言葉と、メールアドレスが書かれていた。

無視するのもなんだし、適当にメールして、今日遊びにこいことになつたのだ。

どうせあと少しの間だけなんだし。

「先輩、この後どこ行きます?」

言いながら、金井が腕を絡めてくる。

「もうそろそろ七時だけど、大丈夫?」

「はい!何時まででもOKでえす」

「じゃあ、『ご飯食べに行こつか。近くに友達のバイトしてるイタリアンレストランあるから。パスタとか嫌いじゃない?』

「大好きです!」

嬉しそうに笑う金井。

ふわりと揺れる柔らかい髪と、睫毛の長い大きな目。

たぶん彼女は、他の男から羨まれるくらい可愛いと思つ。

だから俺も。

今日くらい全て忘れて、楽しもつと決めてたのに。

「の想にも。

菊池のことわ。

やつ黙ひていつやつヒートヒートに来たの」。

田を闊(ひろ)げると、腕に絡まるその温もつけ、やはり奈緒のもので。

嬉しそうに笑う奈緒が、隣を歩いていくような。

金井の着ている白コロナペースは、奈緒が着るときっと似合う
うんだらうなんて。

朝から、そんなことばかり。

今、奈緒は何してんだらうか。

菊池への返事は、一体どうしたんだらう。

そんなこと聞えても、どうしようもなことこの上ない。

頭の中は、昨日の「」と「こつぱ」。

かすかに、苛立ちを覚えて。

たぶんこれが、嫉妬といつやつなのだらう。

そんな自分に、ため息が出る。

「先輩?..どうしたんですか?」

聞かれて我に返る。

「ん。なんでもない」

曖昧に笑顔を作ると、金井もつられたよつて優しく微笑んだ。

周りを見ると、もうカップルばかりだった。

「中村先輩」

「ん？」

「昨日先輩がメールくれたとき、かなりびっくりしました」

「わー?」

「はーい。でも、すこしく嬉しかったです」

金井の方を見ると、恥ずかしそうに下を向いていた。

「先輩」

金井が、さらに体をくつつけてくる。

「私、ずっと先輩のこと好きだったんですよ」

「昨日の手紙に書いてくれてたじやん」

「直接言いたくなつたんですね」

「そつか

「はい」

だんだんと歩くスピードが遅くなり、やがてぴたりと止まった。

「どうした？」

「先輩」

ゆつくりと、金井が顔を上げる。

その頬は、かすかに紅く染まっているようだ。

「本気なんです。中村先輩のこと」

「・・・」

「友達からでいい。だから

絡まっていた腕は、いつのまにか離れていて。

「中村先輩・・・好き・・・どうしようもないくらい」

そつとう金井の声が、あまりにも切なげで。

何も答えず、向かい合つ。

その小さな顎に手を掛け、くい、と持ち上げた。

金井の臉が、自然と降りる。

俺も目を閉じて、そつと顔を近づけた。

翔ちゃん

ぱっと顔を離す。

驚いたような金井の顔。

頭の中でふいに響いた奈緒の声。

「『』めん・・・金井」

「え？」

「ああ。こんなことなら、来なきやよかつた。

「お前じや、駄目だ」

「先輩？」

「俺」

いつか保健室で泣いた時の奈緒の顔が、頭に浮かんだ。

「奈緒のことが、好きなんだ」

自分の想いを、痛感しただけじゃねえか。

1-8・そよなひ

月曜日、また部活があつて。

でもその日は、モモちゃんは来ていなかった。

菊池くんと顔を合わせるのが少し怖かっただけれど、菊池くんはこつもと回じみに接してくれて、少し安心した。

菊池君に、返事はまだしていない。

正直、土曜日の翔ちゃんたちのことが気になつて、このことを考えることができなかつた。

もしかすると、それ自体が答えなのかもしれないけれど。

でも、まだ菊池くんに会えることはできていなかつた。

「あ」

ジャガイモを「じーじー」と洗つて、手を拭い「ひ」としたとき口元がつく。

お手拭、教室に忘れた。

「ん、どしたの?」

隣でジャガイモの皮を向いていた友達が首をかしげる。

「お手拭、教室に忘れてきちゃった」

いいながらジャガイモをわけの中に戻す。

「あ、じゃあ私の使う?」

「いい、いい。この後も結構使つだらうし。ちょっと取りに行つてくわ」

部長に断つて、調理室を出る。

もうすぐ七月も終わりで、校内にはほとんど誰もいなくて。

私の廊下を歩く足音だけが、ぱたぱたと響く。

一階に上がり廊下を真っ直ぐ進む。

教室の前まで来て、ドアを開けようとしたとき、中に誰かいりと
に気がついた。

でもあまり気にせずに、がりごりドアを引く。

そして、窓際に軽くもたれて立っているその人が誰なのかわかった
時、私は思わず足を止めた。

「中村……くん」

真昼間の日に光を背中に浴びて、翔ちゃんは優しく笑っていた。

「よひ

「ひへ、したの？誰か待ってるの？」

「うそ

翔ちゃんの皿が、めりつて細くなる。

「相模、待つてた」

優しいその笑顔は、あまりにも整っていて。

いつもの翔ちゃんじゃない。

「え・・・」

なんだか少し、怖かった。

足が、動かない。

翔ちゃんが、表情を崩さずにむづくつと近づいてきていた。

私の後ろのドアを、静かに閉めた。

「・・・中村くん?」

「相模、」

いきなり、腕をぎゅっと握まれる。

まるで、菊池くんがしたときのよつて。

全く同じ場所で。

同じことを。

「菊池に告白されたんだろ」

そのときの翔ちやんは、もう、笑ってこなくて。

「ひかり腕握まれてさ」

私の腕を握る手に、力が入る。

「いた・・・・・」

振りほざいひとすゐけど、全く離れない。

「相模、菊池のこと好きなの?」

その言葉にて、またぎゅっと胸が痛くなる。

「そんなこと・・・・・。」

無いって言おうとしたけれど、そのときの翔ちゃんの表情があまりにも険しくて。

その言葉はのどに引っかかるて、出でていはくれなかつた。

「ねえ、相模」

翔ちゃんが顔をすつと近づけてきて、

「最後にお願いがあるんだけど」

私の耳元で囁く。

「ヤラセリム」

その言葉が聞こえた瞬間に、どん、と床に押し倒される。

「え、なに?...」

状況が飲み込めない。

今翔ちゃん、なんて?

ヤラセリム

頭の中に、響く、翔ちゃんの低い声。

「え、いやだ!やめてよ、はなして...」

上に被さる翔ちゃんを押し返そうとしても、ビクともしない。

「中村くんにはモモちゃんがいるじゃない！」

「あんなの、ただの遊びに決まつてんだ！」

その声はあまりにも冷たくて。

「やだやだー！中村くん！」

ふつん。

ボタンが一つ外される。

「やめて！いやだよー！」

ふつん。

怖い、怖いよ。

もちろん、その行為 자체も。

だけど、私には分かつてたから。

「中村くん…やめ…」

ふつと。

この行為が終つてしまつたら、もう本当に、前の樂しかつたあの時には、戻る「じ」ができるなくなるつて。

私には、わかつてたから。

ねえ、いやだよ。

そんなの嫌だよ。

翔ちゃん。

「翔ちゃん…！」

その声に、びくつと翔ちゃんの手が止まる。

「お願い…怖いの、翔ちゃん。お願い…」

もう涙でぐしゃぐしゃな私の顔を見て、苦しかつて聞こえをよみせ。

「「あん……むへ、しなこから」

言いながら、わざ外したボタンを留め直していく。

「だから、もう泣くなよ」

優しく私の涙を指で拭う翔ちゃん。

私が少し落ち着くと、すっと翔ちゃんは立ち上がった。

ゆっくりと歩いて行って、ドアの手前で立ち止まる。

「俺さ、父さんの仕事の関係で、明日神戸に引っ越すんだ

え?

今、なんて？

ゆづくじと上半身を起こす。

翔ちゃんは外を向いたままで、顔が見えなかつた。

「どうこう」と、私、何も知らな

「お前のお母さんやおじさん」、お前には知らないでほしいって、
お願いしておいたから

「そんなんのー」

「明日俺があのマンションから出て行くまで、俺の前に現れないで
ほしい」

「え・・・？」

「見送りも、しなくていいから

「何言って

「お前の顔なんか、もう見たくないんだ」

翔ちゃん。

「さよならだよ、俺たち」

一瞬振り返った翔ちゃんの顔が、なんだかものすゝめがわかつで。

廊下を走っていく翔ちゃんの足音だけが、ただ響いていて。

追いかける」となんて、できなかつた。

「相模先輩？」

「菊池くん・・・」

まるで入れ替わるようにして入ってきた菊池くんが、私の涙のあと

に気がついて、慌てて走り寄ってきた。

「戻つてくるのがあまりにも遅かったから、少し心配になつて。どうしたんですか？何かあつたんですか？」

そう言つて、優しく私の肩を支えてくれる。

でもね、「めん。

やつくりと、菊池くんを押し返す。

「菊池くん・・・」めんね・・・。私はやつぱり菊池くんの気持ちに応えられなー」「

菊池くんがかすかに息を吸うのがわかつた。

「私、翔ちゃんが好きなの」

私にはもう、何も恐れるものなんて無いじゃない。

だって、翔ちゃん。

もう私たちは、元には戻れないんだから。

19・二人

部屋の中の荷物が全て運び出され、トラックの荷台の中に詰め込まれていく。

タンスやらベッドやらで、作業は結構大変そうだったけれど。

なんとか無事に終つたらしい。

最後に小さめの本棚が詰め込まれ、バンと大きな音をたてて荷台の扉が閉められた。

「ありがとうございました」

父さんと母さんが引越し業者的人に頭を下げる。

業者の人たちはそれに笑顔で応えた後、トラックに乗り込みゆつくりと出発ていった。

目の前には父さんの白いセダンだけが残り、いきなり開放的に広くなる。

「や、僕らも出発しようつか

言こながら父さんと母さんが車のドアを開けた。

マンションを見上げる。

生まれてから、今までずっと住んできたマンション。

視線の先には、奈緒の住んでいる部屋。

太陽の光が眩しくて、少しだけ霞んで見えるけれど。

その下の階に、俺の住んでいた部屋がある。

ここから見れば、本当に近い場所に俺と奈緒は住んでいたんだなあ
と思つ。

ほん。

何か足にぶつかつたような気がして下を見ると、小さな赤いボールが転がっていて。

捨い上げると同時に、一人の小さな男の子と女の子が駆け寄ってきた。

「お兄ちゃん、ボール」

かえして、とでも言いつつ手をすりと伸ばしていく男の子。

「車には気をつけろよ」

そつと音つきボールを渡してやる。

「ありがとう」

今度は女の子が可愛らしい笑顔でお礼を言いつと、一人はぱたぱたとどこかへ走つていった。

その小さな背中を眺めていると、とても懐かしい気がした。

俺と奈緒は、本当にあれから小さな時から一緒に

奈緒は泣き虫。

そのへんでは。

道端で転んでは、よく泣いていたな。

手を差し伸べてやると、ありがと、と嬉しそうに笑って。

そのときの笑顔が。

あの、幼いころの悪い思い出が。

今でもしつかうと、色あせる」となく俺の中にある。

ずっと、幸せだった。

奈緒と笑って、普通に過ぎてこへ日々が。

でも、いつからなのか。

『気付いたときには、この『氣持ちはまつ』止めることができなこへり
今まで大きくなつていて。

奈緒を泣かせることになる。

そんなことは分かつてたんだ。

だから絶対に知られちゃいけないって。

俺と奈緒は『幼馴染』という、最もなバランスを保っていたの。

ごめんな、奈緒。

それを崩してしまったのは、たぶん俺なんだよな。

ゆづくとマンションから車へ向きを変えた。

中で申し訳なさやつた父さんと母さんの顔が見えて、困ったよつて笑つた。

本当は、神戸なんかに行きたくない。

こんな形で、奈緒と離れなくちゃいけないなんて。

そんなの、本当はずゞく嫌なんだ。

離れたくなんかない。

奈緒と、さよならしたくないんだよ。

でも、それは無理なことだから。

俺だけがここに残ることなんて、できないから。

後部座席のドアを開ける。

中からクーラーの冷気が流れ出る。

なあ、奈緒。

たぶんこれから先、俺たちは恋をする。

それはまだ知らない人とかかもしれないし、もしかするともう知っている人とかかもしれない。

でもきっと、お前以上に好きになれる人は、もういないよ。

「翔ちゃん！」

声がして、振り返る。

奈緒が、マンションの階段を降りて、俺の方へと走ってきていた。

これは伝えられなかつたことだけだ。

奈緒。

君は俺にとって、誰よりも大切な女の子だったんだ。

最終話・翔ちゃん

最終話・翔ちゃん

大きなトラックが数台、下にとまつていて。

最後の荷物を積み終えて、それらが走り出すのを窓から見とじける。

そのあと急いで靴を履き、外の廊下へと飛び出した。

真夏の昼だった。

私は勢い良く階段を駆け下りる。

突然の転勤だつたと、お母さんが教えてくれた。

私が昨日はじめて知ったことにひびく驚いていたようで。

翔ちゃんからは、自分で伝えたいから私には言わないで欲しいと頼

まれていたらしい。

金曜日の夕方、翔ちゃんはおひとりを前におつししてたんだ。

何言つか忘れちつた

夕焼けに染まつた、あのオレンジ色の背中が頭の中をよぎる。

ごめんね、翔ちゃん。

私、何も知らなかつたよ。

何度も階段から滑り落ちそうになりながらも、なんとか下まで着くと、翔ちゃんが車に乗り込むとしているのが目に入った。

「翔ちゃん！」

その声が聞こえたよつで、翔ちゃんが「ひりを振り返る。

思い切り地面を蹴つて走つた。

髪が乱れたって、そんなことビリでもいい。

待つて。

まだ行かないで。

少しだけでいいから。

もつ顔も見たくないと言わされたけれど。

それでも。

最後に、お願い。

全てを、聞いて欲しいの。

「相模・・・」

翔ちゃんの前まで走っていくと、翔ちゃんは少し驚いたような顔をしていた。

「翔ちゃん、『いぬ』ん。来るなつて、言われたの」「

ゆうべつと息を整える。

その間に翔ちゃんは、ぶりと後ろを向こぼしました。

「翔ちゃん、私ね菊池くんに告白されたの」

「・・・」

「好きだって、付き合つてほしこつて言われた」

顔が見えなくて、どんな表情をしているのかわからない。

「私、もう菊池くんと付き合つちゃおつかって、何度もそう思つた」

その言葉に、翔ちゃんがぴくつと反応する。

「でもね、できなかつた」

「ああ、じぶんを握る。

「私、翔ちゃんのことが好きなの

さうと開まっていた気持ち、口にかかるといべへつをつけて
て。

「・・・なんで

「・・・?.

「・・・なんでも今、そんなことないんだが

言葉が、出なかった。

「あさって言わなきや。

頭ではわかつてこぬの」。

翔ちゃんからのがれの和菓子を葉せ、わいわいと前から皿に取えていたことじやなー。

だから、大丈夫。

今は、泣こちやだめ。

泣こちやだめよ、奈緒。

「土曜、金井と遊んだ」

「・・・え？」

いきなりそのことを話しあした翔ちゃん、なんて返せばいいかよくわからなかつた。

「他の女とも、今まで数え切れなくくらい遊んできた」

「・・・」

「そのとおり考へるのよ、こつも、忘れないからいけないって

翔ちゃん?

「でも、無理だった。忘れる」となんてできなかつた

何を、言つてくるの?

「金井のともも、他の女のともも」

よへ、わからなによ。

「頭に思つて浮かぶのは、奈緒、お前の」とじまかつだつた。

「頭に思つて浮かぶのは、奈緒、お前の」とじまかつだつたよ

翔ちゃん。

それは、じつこつ意味なの?

翔ちゃん。

私、まだうまく理解できない。

でも。

久しぶりに聞いた、翔ちゃんの『奈緒』と呼ぶ声が、あまりにも優しくて。

泣いちゃだめって、そう決めてたのに。

歩いてきて、翔ちゃんが私の前に立つ。

向かい合つ、私と翔ちゃん。

「翔ちゃん

「ん?」

「私は、翔ちゃんのこと、好きでいいもの?」

翔ちゃんは静かに微笑んで、優しく私の頬に手をあてた。

「奈緒」

翔ちゃん。

「俺は、ずっと奈緒のことが好きだった」

ねえ、好きだよ。

誰よりも、何よりも、あなたが好き。

ずっと伝えられなかつた気持ち。

溢れる涙は止まらないけれど。

でも、私は今、こんなにも幸せなの。

「一人前になつて、しつかりした大人になつたら、必ず迎えに来るから」

「うふ

「だからその時まで待ってて欲しい」

「うふ……！」

待ってる。

ずっとずっと、待ってるから。

その後翔ちゃんは、指きりの代わりに、キスを一つ私にくれた。

走り出した白いセダンは、徐々にスピードを増していく。

到底追いつけないのに。

私は見えなくなるまで走り続けた。

後ろの窓から身を乗り出して手を振る翔ちゃんは、もしかしたら少

しだけ泣いていたのかもしれない。

でも、これは『せよなら』じゃないから。

だからさつと、私たちなら平氣だよ。

ねえ、翔ちゃん。

私たちはまだ子供で。

よく分からぬことの方がずっと多くて。

私と翔ちゃんが一緒にいた時間は、これから生きていいく長い人生の中の、ほんの一欠片だったのかもしれない。

でも。

それでも。

幼さの残る私たちが、不器用で、悩んだり泣いたりしながらも、や

つぱり好きだつて想つたこの気持ちは、この気持ちだけは、きっと
本物だつたから。

私は信じてる。

私たちは、これからもひとつともひとつ幸せにならなくて。

だから。

ね、翔ちゃん。

おわり

最終話・翔ちゃん（後書き）

『いつも、木村よしです

『翔ちゃんによひじへ』を最後まで読んでくださって、本当にありがとうございました！

続ける限りにいふことが苦手な私ですが、最後まで連載できたのは、本当に読んでくださった皆様のおかげです。
ありがとうございました！

よしはこれからも小説を書いていきたいなって思っています。
なのでこの作品に対し、感想や批評や駄目だしなど、一言でも一言でも、もう厳しそうなお言葉でも、もうなんでもいいので書き込んで頂けると、これからのように励みになります。

なので書き込んでください。笑。

この作品を読んでくださった方々にとつて、奈緒と翔ちゃんが少しでも親しみのもてる子になつてくれたなら、それ以上に幸せなことがあります。

『翔ちゃんによひじへ』を読んでくださって、本当にありがとうございました！

これからも、木村よしと、そして『翔ちゃんによひじへ』を、いつも暖かく見守つてやつてください。。。〃

木村よし。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3828d/>

翔ちゃんによろしく

2010年10月29日23時55分発行